

Oscar Wilde の風習喜劇の言葉

——喜劇性構築のレトリック——

梅津 義宣

(尚絅女学院短期大学助教授)

De Profundis の中で自らを「言葉の王者」(‘a lord of language’) と自負する Oscar Wilde のほとんどあらゆるジャンルの作品に関して共通して言えることは、彼特有の artificiality が顕著に窺えることである。

Wilde の劇作品、とりわけ風習喜劇における芸術世界は、あたかも陶工が轆轤^{ろくろ}の上で粘土を自在に捏ね上げるかのように、さまざまなレトリックが駆使された人工的虚構の世界である。作者のこの「捏ね上げ」は、「人生が芸術を模倣するのであって、芸術が人生を模倣するのではない」としながら真摯に追求する「台詞の様式化」(stylization of speech) であり、また ‘an inventive handling of rhythmical language’, すなわち、「言葉」の厳しい制約・選択である。と同時に、天資の話術の名手 Wilde の口から自ずと繰り出される軽妙にして痛烈なエピソード、日常会話の「瑣末性」が彼の描く風習喜劇に盛り込まれる。彼の風習喜劇の台詞は、制約されたフォームと自由奔放な日常会話の瑣末性、この二律背反する両極が互いに絡み合って独自の喜劇性を織りなしている。

彼の風習喜劇の最初の作品 *Lady Windermere's Fan* の第一幕から例を挙げよう。

LORD DARLINGTON : You think the age very bad?

LADY WINDERMERE : Yes. Nowadays people seem to look on life as a speculation. It is not a speculation. It is a sacrament. Its ideal is Love. Its purification is sacrifice.

ここには、Cohen の言う “Lady Windermere’s puritanical vindictiveness” が顕著に表われており、このようなヴィクトリア時代の人々の典型的特質は *An Ideal Husband* の Lady Chiltern や *A Woman of No Importance* の Hester などにも鮮明に投影されている。このように、Windermere 夫人の言葉には、つねに、他者を許せない「ピューリタンの執拗さ」が顔を覗かせる。上記の Windermere 夫人のさほど長くもない台詞にも seem, speculation; sacrament, sacrifice のように /s/ 音、/sac/ 音の反復（頭韻）や、speculation, purification の脚韻を有効に用いて同音の言葉を畳み掛け、明確な三段論法を用いながら、相手を力強

く説き伏せるさまが鮮やかに映し出される。こうして、夫人の潔癖で、生一本な性格が明瞭な輪郭をもって読者（観客）に写ってくる。

次は、第2幕の劈頭、Windermere 邸で催される舞踏会に参列するために紳士淑女が揃い始めた時の場面である。Dumby を中軸に軽やかな社交界特有の会話が取り交わされる。

DUMBY : Good evening, Lady Stutfield. I suppose this will be the last ball of the season?

LADY STUTFIELD : I suppose so, Mr Dumby. It’s been a very delightful season, hasn’t it?

DUMBY : Quite delightful! Good evening, Duchess. I suppose this will be the last ball of the season?

DUCHESS OF BERWICK : I suppose so, Mr Dumby. It has been a very dull season, hasn’t it?

DUMBY : Dreadfully dull! Dreadfully dull!

この場面で Dumby は、“I suppose this will be the last ball of the season?” という台詞を繰り返しながら客の間を愛嬌をふりまいて歩く。Stutfield 夫人の “It’s been a delightful, hasn’t it?” に対して、Dumby は、“Quite delightful!” と答え、一方 Berwick 公爵夫人が “It has been a very dull season, hasn’t it?” と言えば、“Dreadfully dull! Dreadfully dull!” と答える。ここでは、/d/ 音の反復（頭韻）が明瞭であるが、delightful season から dreadfully dull! のように /d/ 音を巧みに用いながら相手の言葉に応じて両極の意味の言葉を変幻自在に操る Dumby の「カメレオンの」いい加減さ、延いては当時の社交界の軽薄さが寓意的に諷刺されている。

これまで主として *Lady Windermere’s Fan* における「音」の反復について述べたが、Wilde の風習喜劇には彼の得意とする日常会話の言葉とレトリックが見事に溶け合っている例は枚挙にいとまがない。とりわけ彼の劇作の総決算とも言うべき *The Importance of Being Earnest* は、彼の風習喜劇の中でも内容・構成両面で最も高く評価される。二人の主人公、Jack と Algernon と二人を取り巻く登場人物が互いに機智・皮肉・ユーモアに溢れた台詞を繰り出すのであるが、ここにも「意図された様式性」が顕著である。*The Importance of Being Earnest* 第一幕の終りにある対話を引用しよう。

ALGERNON : What shall we do after dinner? Go to a theatre?

JACK : Oh no! I loathe listening.

ALGERNON : Well, let us go to the Club?

JACK : Oh, no! I hate talking.

ALGERNON : Well, we might trot round to Empire at ten.

JACK : Oh, no! I can't bear looking at things. It is so silly.

ALGERNON : Well, what shall we do?

JACK : Nothing.

ここでは 'Oh, no.' の繰り返しが見られるが作品全体の中に 'Oh, it's nonsense' の類が10回, 'It's absurd' の類が9回も使われている。「そんな馬鹿な!」ぐらいの単純な間投詞的表現ともとれるが、このような台詞の反復は、この作品のモチーフである nonsense, nothingness, absurdity と見事に合致している。それぞれの劇において諷刺の対象になっているはずのヴィクトリア朝の観客が、轟くような笑いを以ってこの喜劇を観たという事実、それこそまさに「喜劇」である。

(引用文中のアンダーライン等は、筆者が施したものである。)

ワイルド書誌

1985年8月～1987年3月

梅津義宣

「Oscar Wilde の詩における色彩の象徴性 (II)」

『尚絅女学院短期大学研究報告』33集 (1986. 12) pp 29-38

大曲陽子

「芸術家として批評家—批評家 Wilde —」

『明星英米文学』2号 (1987) pp 45-56

新倉俊一

「キザの天才 (ワイルド)」

『英語のノンセンス』, 東京: 大修館書店, 昭和60, 第11章

古川弘之

「ワイルドと谷崎潤一郎—「法成寺物語」について」

『英米文学』(光華女子大学), No. 5

前川祐一

「『過去を覗く』をめぐって」

『英米文学』(立教大学) 第47号 昭和62年3月

中村真一郎

「本を読む 今日、なぜワイルドを①—『悲劇全集』毎日新聞夕刊、昭和62年5月8日(4)」

「本を読む 今日、なぜワイルドを②—『喜劇全集』毎日新聞夕刊、昭和62年5月9日(4)」

(文責 麓 常夫)

日本ワイルド協会夏期セミナー 『ワイルドをめぐる人々——その美意識の系譜——』

第1日 7月4日(土)午後2時～6時
司会 岩崎 光洋 (玉川学園女子短期大学専任講師)
挨拶 井村 君江 (協会会長)
講演 「観て想う——ラスキン、ペーターからワイルドへ——」
沢井 勇 (実践女子大学教授)
「ワイルドとモーム」
佐藤 喬 (慶応大学教授)
(懇親会 午後7時より交友館にて)

第2日 7月5日(日)午前10時～12時
シンポジウム 「ワイルドをめぐる人々——その美意識の系譜——
——ラスキン、ペーター、ワイルド——」

司会 玉井 暉 (大阪大学助教授)
発題者 都築 佑吉 (群馬大学教授)
井村 君江 (明星大学教授)
日時 昭和62年7月4日(土), 5日(日)
場所 八王子大学セミナーハウス 中央セミナー館
〒192-03 東京都八王子市下柚木1987-1 ☎0426(76)8511-3

申し込み先 明星大学 井村研究室「日本ワイルド協会事務局」
〒191 東京都日野市程久保2-1-1
☎0425(91)5111(内)249

